

俳人蕪村と詞

劉 岸 偉

(一) かな書き詩人

天明三年十二月二十五日の明け方、蕪村は白梅と冬鶯の美しい句を残して、この世を去った。友人の上田秋成は蕪叟の訃告を聞いて、「かな書の詩人西せり東風吹て」と嘆いた。

かな文学の創始者紀貫之を思わせる秋成のこの句は蕪村の句境ばかりでなく、天明俳諧の多彩な性格の一面をも包摂した。享保以来、益々隆盛を加えた漢詩文は古学の復興と相まって、天明一代の新たな俳風を築きあげた。蕪村の古典趣味と中国趣味はその典型的な現われであると言えよう。蕪村のことを「詩人」と呼ばれるのはまさに正鵠を得た適評であらう。

蕪村を考える場合、漢詩文の影響を無視してはならない。

草田男氏の言うとおり、「蕪村における俳句の新化の一面は、漢詩趣味と漢語の導入に負っているといっても過言ではない」⁽¹⁾。そして蕪村の創作の素材、詩想の供給源の一つとなる漢詩文の構成は実に多元的なものである。一口で漢詩とは言っても、

唐土の漢詩と日本人の手になる漢詩、特に江戸時代の古文辞派の影響の両方を含む。蕪村の読みあさった漢籍は『詩経』をはじめ、『白氏文集』『莊子』『唐詩選』『三体詩』『聯珠詩格』『古文真宝』『蒙求』など二十数種の書物が想定される。其の中には、詩や賦などの韻文ばかりではなく、故事を集めた啓蒙書『蒙求』のような散文体のももある。蕪村の句とこれらの漢籍とのつながりについては、多くの研究者によって実に丁寧に調べられ、指摘され、多くのことを教えられる。しかし、従来の研究をふりかえってみると、中国文学ジャンルの一つ、漢詩(律、絶)と対蹠的な大韻文様式である詞を殆ど閑却した感がある。もともと、中国において盛んに行われ、日本でふるわないものの一つに詞がある。昔から日本人に馴染み親まれた漢詩と比べて、詞のほうはあまり知られていないのが事実である。それに日本人で「填詞の作に指を染めたのは、平安期の昔に嵯峨天皇と兼明親王との在ら

れた以外には、あとは江戸時代から近く明治大正の時代に至るまでを通じて僅かに寥々百人も満ため極く少数の好事家があったばかりの淋しい状態である。⁽²⁾しかし、近世における詞の受容を考察すると、江戸中期から、安永、天明の交にかけて、日本において、詞は俄然勃興して、詞に対する関心が一般知識人の間に相当普及していた史実を忘れてはならない。こういう気運の中に暮していた一俳人、いや一詩人の蕪村は初めから詞と没交渉であったとは思えない。この小論は蕪村のいくつかの句を手がかりに、江戸期における詞の受容と流行という背景の中に、俳人蕪村と詞を考えたい。

(二) 詞の受容と流行

江戸時代の漢詩人に村瀬栲亭と菅茶山の二人がいる。この二人とも蕪村を尊敬していた。そして茶山は若い時、蕪村に会っていたらしい。田能村竹田氏の『屠赤瓊々録』によると、「翁（茶山）又云ふ、大雅より蕪村画は上手なり、蕪村には毎度葛陂先生の宅にて出会す。それ共翁も其時は少年にて事を慢り、遂に一度も挨拶もせずして過す、残念なる事也。」⁽³⁾同じ竹田氏の『山中人鯁舌』には「皆川翁之於芦雪、栲亭翁之於春星、道載翁之於月僊、茶山翁之於月溪、終身愛許称賛不措。」⁽⁴⁾とがある。栲亭は博学洽聞、詩に長ずると共に書画を善くした。当時京都の風流儒者の名があったという。⁽⁵⁾茶山と栲亭の文筆活動に関して、私は特に記したいのは二人とも「填

詞の作に指を染めた極く少数の好事家」であったということである。

詞或は填詞とは唐代に源を発し、宋代の間にもっとも盛んに作られ、漢の賦、唐の詩、元の曲とならべて宋代を代表する韻文様式である。就中、詩と詞は併称される二大文学ジャンルとしてしばしば対比される。表現の形式は勿論、それぞれ表現し得る領域にも大きなずれが存する。詩（近体）は五言或は七言の均整のとれた形を持つに對して、詞は「長短句」の異称がある如く、一首の中に長短さまざまな句をまじえ用いる方が普通である。そして、詞はもともと既存のメロディにあてはめた歌謡曲の歌辞であるので、そのリズムがはげみ音楽感に富んでいた。そればかりでなく、詞は「能く詩の言う能わざる所を言うも、詩の能く言う所を尽く言うこと能わず。」（清、王国維『人間詞話』上）恰も和歌と俳句の如く、それぞれ領分が違うのである。

日本における詞の濫觴は早くも平安朝の初期嵯峨天皇に溯ることができる。その御製の漁歌子五闋は明らかに唐の張志和の名高い漁父詞五首に放った作品である。⁽⁶⁾今、その一首を録す。

西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥。青箬笠綠蓑衣、斜風細雨不須帰。

白鳥の白を、桃の花のうす赤色、青い箬笠、緑色の蓑衣、

これらはすべて細い銀の糸のような春雨の中に籠っている。煙るような春雨と雨に濡れて光出している箬笠、蓑衣は思わずわれわれを蕨村の句境に導く。

「春雨やものがたりゆく蓑と傘」これについてまた後述をさせていく。

日本における詞は嵯峨天皇の御製のほかに兼明親王の憶亀山が挙げられる。しかし、それ以来久しく断ちきれていた。詞の再興は数百年後の江戸中期を待たなければならなかった。神田喜一郎氏の『日本における中国文学』によると、江戸中期、中国に発達した明清の文人趣味が伝わりと共に、当時文人の間に一種の新鮮味を帯びた芸術として、文人画と詞が俄然勃興してきた。紀州の文学、詩、書、画を以て一世を独歩した祇園南海がその好例である。南海は江戸の南郭と並べて日本近世における文人画のパイオニアであった。詞についても南海が熱心な好事家であった。詞が盛んに紹介され、勃興の氣運に向いていた頃ちようど唐話学が発達し、白話小説や戯曲が盛んに読まれ、研究された時代でもあった。しかもその学問の中心は江戸より京坂へ西漸したのである。青木正児博士の『国文学と支那文学』によると、寛延元年に卒した随縁道人の「典籍概見」(死後の宝暦四年刊行)には詞のアンソロジー『花間集』、『草堂詩餘』の二書を紹介した。江戸中期から詞が文化人の間に普及され始めた一因は神田博士の

指摘されるとおり、唐話学の発達とともに、俗語小説が流行した結果、その中に挿入されている多くの詞を読みこなす必要があったからである。(蕨村の叙情長詩『春風馬堤曲』の中に多くの俗語を用いた。例えば、儂、老婆子、記得、猫兒など、この俗語小説の流行と果して無縁であろうか)当時唐話及び白話小説に通曉していた学者の書物にはしばしば詞に言及した箇所がある。例えば、京坂に於ける屈指の唐話学者岡田白駒には日本の俗楽俗劇を概説する填詞引がある。更に當時小説と俗語通を以て京都に鳴した学者田文愁の墓碑銘には「操吳音頗解俗語。博覽近世小説。其詞小説當世莫比。日本未有詞曲而君始作詞。皆國儒所未及也。」とある。また京都に唐音主張者厚双桂(享保三年、明和四年)がいた。彼は肥前唐津の土井侯に医師として仕え、通事も兼ねていた。宝暦十年侯に従って巡視し、命によって通訳をつとめた。「華音を操り、華人が謬って郷音を出せば晒って之を改め呼んだといひ、又詩餘小曲を唱へて大いに面目を施したので擢でられて儒学の教授になった。」^⑩という。神田喜一郎博士によると、明和、安永の交、一時京都で流行した鉅鹿氏所傳の明樂でも盛んに填詞が歌辞として唱われたらしい。蕨村と面識のあった菅茶山の詩集『黄葉夕陽村舍詩』前編卷一の末にも「新樂府」(詞の異称)と題して填詞が八關収録されている。いずれも天明二年以前の作である点に、當時詞の流行の一端をかいまみ

ることができよう。

(三) 蕪村の句と詞

京都の風流儒者村瀬栲亭はかつて「更漏子」の調に寄せた一関の詞を作った。題は「看菊」。その詞に云う

草鋪甍、花逐客、不必問那彭澤。孔雀尾、黃金釘、難比到底清。兩枝遲、三枝早、各自風情恰好。一帶露、一籬香、任君滌肺腸。^⑪彭澤とは江西省にある県の名、ここでは菊を愛した晋の陶潜を指しているだろう。(陶が一時彭澤の令になったことによる)孔雀尾、黃金釘などは各種の菊の愛称であらう。私は特に気に入ったのは「兩枝遅く、三枝早く、各自風情恰好」の一句である。菊の花の開花に遅速があっても、それぞれ風情があるという意味。この菊を梅に置き換えれば、俳句になおすと、蕪村の「二もとの梅に遅速を愛す哉」になるのではなからうか。この句は『和漢朗詠集』の対句「東岸西岸之柳遅速不同、南枝北枝之梅開花已異」を踏えて作られたと言われるが、慶滋保胤のこの対句に単なる自然現象に対する觀察であるに対して、山野一面に花が咲きみだれるのは壯観だけれども、二枝早く、三枝遅くばつと花が咲くのもそれなりの風情がある。花の遅速を眺めるのも実に楽しいことだと蕪村と栲亭が言うのである。

蕪村の梅の句は安永三年の作と推定されるが、栲亭の「看菊」をのせている『栲亭三稿』が文政九年の刊行であるが、

製作年代は不明。両者は初めから没交渉であつたかも知れない。

梨の園に人いめりおぼろ月

白い梨の花はそよ風にゆれている。うすぼんやりと霞んだ月の光に照されて、花の白さは一段と柔く見える。花の下に小径があり、そこに徘徊する詩人がいる。春の夜は実に静かである。この句は宋代の詩人宰相晏殊の寓意詩を踏えているものであらう。「梨花院落溶溶月、柳絮池塘淡々風」がそのもっとも名高い一聯である。この晏殊なる人は北宋中葉の宰相で、七才の時から文章を書き、神童としてもてはやされていた。宋の仁宗に仕え、官は觀文殿大学士に至った。『宋史本傳』には「詩は尤も工み、閑雅で情意有り^⑫」とあり、「詩人大臣」とも呼ばれていた。しかし、晏殊は詩人というよりもむしろ詞人の名にふさわしい人である。「彼がおさめた最も大きな成功、そして詩人としての彼の真の姿はすべて彼の詞の中に託されている。彼の詩は彼を代表するに足らず、彼の文章も彼を表現するに足りない」^⑬晏殊には『珠玉詞』があり、百数十首の詞を収めている。その傑作の一つに「浣溪沙」がある。いまでも人々に愛誦されている。

一曲の新詞酒一杯、

去年の天気旧亭台、

夕陽西に下りて幾時か回らん。

奈何す可くも無く花は落ち去き、

曾て相識りし似く燕は帰り来る、

小園の香径、獨り徘徊す。

この詞を詠みながら、もう一度蕪村の「梨の園」を思い出していたきたい。梨の花の咲く庭に月の照る情景は蕪村の句と寓意詩の持つ共通点ではあるが、しかし寓意詩の「梨花院落溶々月」には徘徊する詩人がいない。「人いめり」は少し歩いて立ちどまるさま、考えにふけて行ったり来たりする意味でもあるので「梨の園に人いめりおぼる月」は「小園香径獨徘徊」の詞境に通じるのではなからうか。因みに、晏殊の「珠玉詞」を収録した「宋六十名家詞」という書物は明の毛晋が編集したもので、明和二年、長崎に来た唐船によって日本に伝来された⁽¹⁾。一方、蕪村の「梨の園」は安永二年の作品と推定される⁽²⁾。

「春雨やものかたりゆく簑と傘」

煙の如く霞んだ春雨がしとしと降りつづける。空の空気を濡し、野辺の草を濡し、堤の柳を濡し、村の家も濡した。春雨の中を簑と傘の二人が話しあいながら雨の中を去ってゆく。人の声が消え、簑と傘が私たちの視野の中に薄らいでいく。春の雨は依然としとしと物音もせずに降りつづけているのである。時刻は雨気の低迷している遅き日の暮れそうである。時刻は雨気の低迷している遅き日の暮れそうである。閑れない午後のことであろう。春雨、簑、傘は私たちをある閑

かな暮春の小宇宙に導き、南画的世界に誘っていくのである。そば降る春雨の中にぼつりと簑と傘の二点が映る様はまた張志和の「漁父詞」の描いた青い箬笠、緑の簑、低迷している春雨という春日小景を思わせる。

(四)春風馬堤曲と詞

蕪村の「春風馬堤曲」は日本の韻文史上不朽の名作として人口に膾炙している。この叙情長詩は和漢諸体の詩形をないまぜ、可憐なる藪入り娘に作者の郷愁を託した視覚的にも、聴覚的にも「古今未曾有の珍しき詩」である。それが故に、明治期の佐藤紅緑をはじめ、多くの研究者を引きつけたのである。これらの研究には、その製作動機や主題に関するものと、その形式の源流を探究するものの二類に大別される。どれを見ても、綿密な調査の上に立てられた斬新卓抜の論ばかりで、私はもはやひそみに倣って異論を立てる余地がない。しかし、同じ物事についても、観察者の立場、角度によって、印象も大部違ってくるということもあるので、敢えて一家の言を述べ、大方の一笑に供せんとする。

額原退蔵博士には「春風馬堤曲の源流」というすぐれた論考があり、「春風馬堤曲」を一種の叙情自由詩と見なして、その自由詩の流れとして、嵯川の「立君の詞」、尾谷の「胡蝶歌」、文喬の「袖浦の歌」をとりあげた。「立君の詞」は享保二十一年三月刊の「茶話稿」にのっていたのである。そ

の内容は左のとおり

よるはありたや、雨夜はいやよ
ふればふらるる、此ふり袖も

草の野上の、野の花すすき

まねきよせたら、まくらにかそよ

かきにかくれて、ふたりで寝よふ

ござれござれよ、月の出ぬまに⁽¹⁵⁾

「これは一見支考の所謂仮名詩に類しているがその趣は全く異なるのである」と頼原博士は指摘した。「立君の詞」は七七調の連続で、一見仮名詩の十四字七言の体に似てはいるが、これは六句から構成されていて、絶句にも、律にも当たらない。こういう風体の韻文は一体どういうふうに出されたのだろうか。管見によれば、詞の形式に示唆を受けたのではないか。実は前にとりあげた晏殊の詞「浣溪沙」も七言で六句から成っている。詞は声調音律の美に重心をおく所の文学で、漢詩の受容と影響に比べて、確かに不毛性を持っている。山本北山はかつて『作詩志』において、詞の平仄の難しさを強調してほとんど不可触と嘆いた。それが故に、詞の平仄音律にうとい江戸時代の人々には詞を一種の長短不定の自由詩として受けとめた可能性がないとは言えない、そしてその斬新な「詩形」に示唆されたことも考えられないことはなからう。

「春風馬堤曲」や「澱河歌」に影響を与えたと思われる先行

作品について、研究者の多くはしばしば中国の「楽府」詩をとりあげる⁽¹⁶⁾。楽府とは漢詩の古詩の一体としての名称である。昔、前漢の音楽を司る官署の称より発して、のちに音楽と切り離された歌辞の称となり、古詩の一体となったのである。

この楽府と名づけられた古詩は平仄や押韻の規則は厳しいものではなく、句の長短についてもかなり自由である。蕪村の「春風馬堤曲」の「曲」という字と、「澱河歌」の「歌」という字はいずれも「楽府」を指し、「楽府」の名題の一つであることを指摘した研究者もいる⁽¹⁷⁾。「春風馬堤曲」の独特な韻文様式の成立を説明するのに大変重要な指摘であると思う。ところがこの「楽府」、「曲」、「歌」、「歌曲」(蕪村の漢文序文に出てきた用語)などはいずれも詞の異称でもあることを注意していただきたい。詞はその成立時期から、楽府と切っても切れぬ関係を持っている。両者はいずれも音楽と切り離された歌辞なのである。宋代に至って、詞は一つの独立した文学ジャンルとして成熟してからも、しばしば「楽府」と呼ばれた⁽¹⁸⁾。江戸時代の文人たちもこの慣習に従ったらしい。例えば江村北海は「楽府類解の凡例」において「唐に填詞あり、宋に詞あり、元に曲あり、並びに古楽府の流委派別のものなり、楽府ならざるにあらず云々」という。また菅茶山は「筆のすさび」において詩体明弁を引いて、歌、行、引、曲、吟、詞、などはいずれも詩の変体で、これらをすべて楽府と

云ふと記している⁽¹⁹⁾。そして、茶山自身の詩集に収められた詞も「新楽府」という名称が使われた。しかし、楽府と呼ばれる古詩と宋代の成熟した詞とはやはり明瞭に識別し得る。北京大学の王力先生の『漢語詩律学』によると、「詞の三大特徴とは①全篇固定の字数、②長短句、③律化の平仄である。

古楽府は①②を具備し、③を欠く」という。古楽府は句の長短についてかなり自由ではあるが、詞ほどバリエーションに富んだものではない。詞は歌辞自体が平仄による調を伴っているうえ、長短の句末に織り込んだ音韻の変化が加わるから、その声調は何とも言えない美を持っている。特に文の長短不定の排列によって抑揚のある独特なリズムと交錯の音響を生み出し、その歌辞の表現する感情の起伏強弱にも合うのである。これによって一種の特殊の効果を来たす。

一方蕪村の「春風馬堤曲」を見てみると、発句形、均整のとれた漢詩形、やや硬く聞こえる漢文の読み下しの調べ、全く無定型の自由な調べなど様々な「詩形」を組み合せることによって、一種の独特なリズムと交錯の音響を創出す。そして、作品の主題の展開と作者の感情の高まりを、詩形の変化によって変っていく。「最初は蕪村得意の俳句や漢詩で出発したのが段々感興が高潮して来るにつれて、定型の詩形では其感興が盛り切れなくなつて、おのづから自由な詩形に移つて行つたと言う傾きがある」という人もいる⁽²⁰⁾。「おのづから」

というより、蕪村は各種の詩形の意図的配置、それによるテンポの変化によって一種の効果をねらった感さもある。一種の吟唱効果であろう。これは蕪村がこの十八首の作品を「歌曲」と呼んだ故であろう。蕪村は「春風馬堤曲」に「曲」という名称をつけた時、唐土で新しく興り、そして当時日本でも流行っていた新しい韻文様式——詞を意識していたのだろうか、果して無縁であらうか。

最後に「春風馬堤曲」の用語について、一こと述べさせていたきたい。第七首の「店中有二客、能解江南語」の「江南」については、浪華詞を漢語ふうに表示したという見方が一般的であるが、いま一つ附けくわえたいのは、「江南」という語は詞人の愛用語で、また詞の調べ（詞牌）の名称でもあるということである。例えば「夢江南」、「憶江南」、「江南好」などがそれである。有名なのは白樂天の「憶江南」である。その詞に云う

江南の好き

風景舊曾て諳んず

日出づれば、江花紅きこと火に勝り

春来りて、江水緑きこと藍の如し

能く江南を憶わざらんや

江南という語は詞人にとってあてがれの彼方であり、昔の思い出、ノスタルジアの託された感傷地で、郷里である。温

庭衛の詞に「疏洗罷り、獨り江を望む玉樓に倚る」の句があり、「望江南」と名づく。皇甫松の詞に「間かに夢む江南の梅の熟する日」の句があり、「夢江南」と名づく。蕪村はこの詞人の愛用した「江南」を摘みとって、自分の郷愁を注いだのであろう。そして蕪村の画作には「河南趙居」、「淀南趙居」などの落款を用いたところを見ると、「江南」が蕪村の故郷毛馬を指している言葉であることはほぼ間違いないであろう。

終、一九八六年七月八日

(1) 『蕪村・一茶』日本古典鑑賞講座第二十二巻 一二三頁 角川書店

(2) 『日本における中国文学』神田喜一郎著、三頁 二玄社

(3) 『蕪村全集』(附録) 頼原退蔵編 八六頁

(4) 『山中入饒舌』田能村竹田著、八二頁、笠間書院

(5) 『日本における中国文学』(前出) 一二〇頁

(6) 前出書 八頁

(7) 『支那文学芸術考』所収 青木正児著 五九頁

(8) 『近世日本に於ける支那俗語文学史』石崎又造著、一五一頁

弘文堂書房

(9) 前出書 一五九頁

(10) 前出書 一七二頁

(11) 『日本における中国文学』(前出) 一二三頁

(12) 『挿図本中国文学史』鄭振鐸著 四七九頁 人民文学出版社

(13) 前出書 四七九頁

(14) 『唐船持渡書の研究』大庭修著

(15) 『蕪村』頼原退蔵著 二四頁、創元社

(16) 仁枝忠の「春風馬堤曲の漢詩的背景」『俳文学と漢文学』所収 一一五頁 笠間書院。尾形仞の「潑河歌の周辺」『座の文学』所収 二一九頁 角川書店。清水孝之校注『与謝蕪村集』新潮社

(17) 仁枝忠 「俳文学と漢文学」 一一五頁

(18) 「詞の異称について」『宋詞研究』所収、村上哲見著 五三頁 創文社

(19) 「筆のすさび」『日本隨筆大成』第一期第一冊所収 一五一頁 吉川弘文館

(20) 伊藤正雄「鬼貫と蕪村―鬼貫の俳論・俳句と蕪村の八春風馬堤曲Vを中心に」

(21) 「与謝蕪村略年譜」には(宝暦八年条に)陶淵明図(河南趙居写)、牧馬図(馬擬南蘋人用自家 淀南趙居)とある。『与謝蕪村集』(前出) 所収、三九七頁